評価項目のスコア及びその判断基準の比較

大　　中　　小　　斜体：現在審議中

○牛豚フルオロキノロンNo. 2

特定したハザード		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター		カンピロバクター		カンピロバクター		サルモネラ		カンピロバクター		大腸菌		カンピロバクター		サルモネラ		大腸菌	
評価段階	判断項目	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果
発生	遺伝的特性	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中： 1か所の変異で耐性獲得 伝達性耐性遺伝子の存在	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 耐性株で伝達による*ermB*遺伝子獲得の報告は無く、*ermB*遺伝子保有菌の報告まれ	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 耐性株で伝達による*ermB*遺伝子獲得の報告は無く、*ermB*遺伝子保有菌の報告まれ	低度（１）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	大： 1か所の変異で耐性獲得 投与で速やかに耐性菌が選択	中等度（２）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 耐性株で伝達による*ermB*遺伝子獲得の報告は無く、*ermB*遺伝子保有菌の報告まれ	低度（１）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）
	耐性率及び感受性	小：一般大腸菌の耐性率や感受性に大きな変動はない(耐性率0～1.5%(牛)、0～4.1%(豚)) 腸管出血性大腸菌に耐性みられない		小：耐性率低く、感受性は概ね維持（耐性率0%）		中：耐性率高く(0～30.3%(牛由来*C. jejuni*)、0～30.3%（豚由来*C. coli*))、豚で増加傾向		中：耐性率は比較的高く推移（44～62%）		小：牛由来*C. jejuni*ではエリスロマイシン耐性株は分離されない*C. coli*で少数検出されるが、耐性率の上昇はない		小： 感受性は概ね維持（耐性率0%）		中：耐性率高く、増加傾向（2007年まで）、2008年以降大きな変動なし		中： 健康鶏は10% 病鶏由来では20%以上		小：牛由来*C. jejuni*ではエリスロマイシン耐性株は分離されない*C. coli*で少数検出されるが、耐性率の上昇はない		小： 耐性菌あるが、感受性に大きな変動なく、維持 耐性率0～10%（牛）、0～1.7%(豚)		小： 感受性に大きな変動なし 耐性率0～1.5%（牛）、0～1.5%(豚)	
	その他要因	小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小： 懸念されるものがあまりない		中： フルオロキノロンの流通量の約6割が鶏用フルオロキノロン耐性獲得株は鶏体内での定着性上昇、選択圧のない状態で長期に維持		中： 病鶏で使用実態を反映している可能性		小：懸念されるものがあまりない		小： 懸念されるものがあまりない		小： 懸念されるものがあまりない	

○牛豚フルオロキノロンNo. 16

特定したハザード		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター		カンピロバクター		腸球菌		サルモネラ		大腸菌		大腸菌		カンピロバクター		カンピロバクター		黄色ブドウ球菌	
評価段階	判断項目	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果
発生	遺伝的特性	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	大： 1か所の変異で耐性獲得 伝達性耐性遺伝子の存在 投与で速やかに耐性菌が選択	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 *ermB*遺伝子保有菌の報告まれ *ermB*遺伝子は染色体上のMDRGIに存在し、伝達可能	低度（１）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	中等度（２）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中： *mcr-1*の存在	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 *ermB*遺伝子保有菌の報告まれ *ermB*遺伝子は染色体上のMDRGIに存在し、伝達可能	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 伝達性耐性遺伝子が存在するが、保有はまれ	低度（１）～中等度（２）	中： 伝達性耐性遺伝子 多剤耐性ST398国内報告少ない	中等度（２）
	耐性率及び感受性	小：一般大腸菌の耐性率や感受性に大きな変動はない(耐性率0～1.5%(牛)、0～4.1%(豚)) 腸管出血性大腸菌に耐性みられない		小：耐性率低く、感受性は概ね維持（耐性率0%）		中：耐性率高く(8.8～42.4%(牛由来*C. jejuni*)、21.3～55.1%(豚由来*C. coli*))、増加傾向		小：牛由来*C. jejuni*ではエリスロマイシン耐性株は分離されない*C. coli*で少数検出されるが、耐性率の上昇はない		小： 低感受性菌が検出（0～21%）、2007年以降は低いレベル		小： 耐性菌あるが、感受性に大きな変動なく、維持 耐性率0～10%（牛）、0～1.7%(豚)		小： 感受性に大きな変動なし 耐性率0～2.0%（牛）、0～2.8%(豚)		中： 健康家畜1～4.7%。 病鶏由来では2～40%。		中：耐性率は比較的高く推移（41～62%）		小：牛鶏由来*C. jejuni*でエリスロマイシン耐性はほとんどみられない **中**：豚由来*C. coli*の耐性率は比較的高い（34～53.8%）		小： TC耐性傾向不明 MRSA分離率低い ST398の分離報告はわずか	
	その他要因	小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		中： 飼料添加物として使用		小： 懸念されるものがあまりない		小： 懸念されるものがあまりない		中： 飼添も使用 使用量とmcr陽性率の関連		小：懸念されるものがあまりない		**小**：牛鶏では懸念されるものがあまりない **中**：豚で使用量は突出。飼添も豚にのみ使用可能。		中： 抗菌剤販売総計の45%前後	

○豚ツラスロマイシンNo. 4

○牛ピルリマイシンNo. 5

○鶏フルオロキノロンNo. 11

○牛ガミスロマイシンNo. 13

○牛豚セフチオフルNo. 15

○牛ツラスロマイシンNo. 17

○豚鶏バージニアマイシンNo. 19

○牛豚セフキノムNo. 20

○牛豚鶏コリスチン（第1版）No. 21

○豚ガミスロマイシンNo. 22

○牛豚鶏マクロライド系No. 24

○牛豚鶏テトラサイクリン系No. 25

特定したハザード		○牛豚鶏マクロライド系（第2版）No. 30 カンピロバクター		○牛豚硫酸コリスチン（第2版）No. 30 大腸菌		サルモネラ		○牛豚鶏ST合剤No. 32 大腸菌		黄色ブドウ球菌		○牛豚フルオロキノロンNo. 33 腸管出血性大腸菌		サルモネラ		○牛豚フルオロキノロンNo. 34 カンピロバクター		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター	
評価段階	判断項目	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果
発生	遺伝的特性	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 伝達性耐性遺伝子が存在するが、保有はまれ	低度（１）～中等度（２）	中： *mcr*保有率低い 適応負担あり	低度（１）	中： *mcr*保有率低い 適応負担あり	低度（１）	中： 伝達性耐性遺伝子の存在 使用に伴うS、T耐性選択	中等度（２）	中： 伝達性耐性遺伝子 使用に伴うS、T耐性選択	中等度（２）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	大： 1か所の変異で耐性獲得 伝達性耐性遺伝子の存在 投与で速やかに耐性菌が選択	中等度（２）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	大： 1か所の変異で耐性獲得 伝達性耐性遺伝子の存在 投与で速やかに耐性菌が選択	中等度（２）
	耐性率及び感受性	小：牛鶏由来*C. jejuni*でエリスロマイシン耐性はほとんどみられない 中：豚由来*C. coli*の耐性率は比較的高い（34～53.8%）		小： 健康家畜1.1～4.6% リスク管理による使用量減により耐性率が上昇する可能性低い		小： 健康家畜0～16% リスク管理による使用量減により耐性率が上昇する可能性低い		中： 健康牛で2～5.3%、 健康豚・健康鶏で23～35%		中： ST耐性率不明 LA-MRSAのT耐性90%以上 ST398分離率は約3～17%		小：一般大腸菌の耐性率や感受性に大きな変動はない（耐性率0～1.5%（牛）、0～4.4%(豚)） 腸管出血性大腸菌に耐性みられない		小：耐性率低く、感受性は概ね維持（耐性率0～3.3%）		中：2016年以降、耐性率高いが、大きな上昇はなし(31.4～59.8%(牛由来*C. jejuni*)、40.0～59.0%（豚由来*C. coli*))	中等度（２）	小：一般大腸菌の耐性率や感受性に大きな変動はない（耐性率0～1.5%（牛）、0～4.4%(豚)） 腸管出血性大腸菌に耐性みられない	低度（１）	小：耐性率低く、感受性は概ね維持（耐性率0～3.3%）	低度（１）	中：2016年以降、耐性率高いが、大きな上昇はなし(31.4～62.7%(牛由来*C. jejuni*)、40.0～59.0%（豚由来*C. coli*)) ただし、2019年及び2020年は60%前後。	中等度（２）
	その他要因	小：牛鶏では懸念されるものがあまりない 中：豚で使用量は突出。飼添も豚にのみ使用可能。		小： 飼添の取消し 使用総量が概ね半減		小： 飼添の取消し 使用総量が概ね半減		中： 使用量約50～76t/年 使用量と耐性率の関連		小： 使用量多い（約50～76t/年） 使用量と耐性率の関連 有効菌種ではない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない	

特定したハザード		○牛豚フルオロキノロンNo. 35 腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター		○牛ツラスロマイシンNo. 36 カンピロバクター		○牛馬豚鶏アミノグリコシドNo. 37 大腸菌		腸球菌		○牛ホスホマイシンNo. 38 腸管出血性大腸菌		大腸菌	
評価段階	判断項目	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果	判断根拠	評価結果
発生	遺伝的特性	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	大： 1か所の変異で耐性獲得 伝達性耐性遺伝子の存在 投与で速やかに耐性菌が選択	中等度（２）	中： 一般的な耐性機序は染色体突然変異 *erm*遺伝子保有菌の報告まれ *ermB*遺伝子は染色体上のMDRGIIに存在し、伝達可能	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	中等度（２）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	中等度（２）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）	中：伝達性耐性遺伝子の存在	低度（１）
	耐性率及び感受性	小：一般大腸菌の耐性率や感受性に大きな変動はない（耐性率0～1.5%（牛）、0～4.4%(豚)） 腸管出血性大腸菌に耐性みられない		小：耐性率低く、感受性は概ね維持（耐性率0～3.3%）		中：2016年以降、耐性率高いが、大きな上昇はなし(31.4～62.7%(牛由来*C. jejuni*)、40.0～59.0%（豚由来*C. coli*)) ただし、2019年及び2020年は60%前後。		小：牛由来*C. jejuni*及び*C. coli*からエリスロマイシン及びアジスロマイシン体制株が少数検出されるが、耐性率の上昇はない		中：健康畜由来株の耐性率が50%を超える肉用鶏由来株のKM耐性率は上昇傾向		中：健康畜由来株の耐性率が50%を超えるKM及びGMについて2018年度はそれまでと比べて有意に上昇		小：健康牛由来EHEC及び大腸菌の耐性率は10%未満、FOM耐性率は低く推移し、上昇傾向は認められない。		小：健康牛由来EHEC及び大腸菌の耐性率は10%未満、FOM耐性率は低く推移し、上昇傾向は認められない。	
	その他要因	小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：販売量の顕著な上昇傾向がない		小：販売量の顕著な上昇傾向がない		小：販売量は注射用が100 kg未満、経口用が水産動物用を入れても1t未満であり、顕著な上昇傾向はない		小：販売量は注射用が100 kg未満、経口用が水産動物用を入れても1t未満であり、顕著な上昇傾向はない	

特定したハザード		○牛豚フルオロキノロンNo. 2 腸管出血性大腸菌		○牛豚フルオロキノロンNo. 2 サルモネラ		○牛豚フルオロキノロンNo. 2 カンピロバクター		○豚ツラスロマイシンNo. 4 カンピロバクター		○牛ピルリマイシンNo. 5 カンピロバクター		○鶏フルオロキノロンNo. 11 サルモネラ		○鶏フルオロキノロンNo. 11 カンピロバクター		○牛豚フルオロキノロンNo. 16 大腸菌		○牛ガミスロマイシンNo. 13 カンピロバクター		○牛豚セフチオフルNo. 15 サルモネラ		○牛豚セフチオフルNo. 15 大腸菌	
ばく露	生物学的特性	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：鶏の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：鶏の腸内常在菌、食肉中で生存可能		小： 食肉中で生存可能 ヒトの腸内細菌叢として定着する可能性は低い		小：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能、冷蔵及び冷凍保存下で徐々に死滅		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	
	食品汚染状況	小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく(0～0.5%)、それらのハザードによる汚染はさらに少ない(耐性率0～2.8%)	低度（1）	小：牛肉及び豚肉の汚染は少ない（0～5.1%）	低度（1）	小：牛肉及び豚肉の汚染は少ない（0%）	低度（1）	小：豚肉の汚染は少なく、それらのハザードによる汚染はさらに少ない	低度（1）	小：牛肉の汚染は少なく、それらのハザードによる汚染はさらに少ない	低度（1）	中： 陽性率高い（30～50%） 耐性率は低い（2%）	中等度（2）	大：食肉における陽性率が高く（17～59%）、フルオロキノロン耐性菌の割合が高い（41%）、食鳥処理場での検出率がサルモネラ（0～11.4%）より高い	中等度（2）	中： 陽性率高い（80%） 耐性率は高くない（10%）	低度（1）	小：牛肉の汚染は少なく、それらのハザードによる汚染はさらに少ない	無視（0）	小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～4.7%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない	低度（1）	小：陽性率高い（58～88%） 耐性率は低い（0%）	低度（1）
	その他要因	小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		中：鶏由来食品はカンピロバクター感染症の原因食品として割合大、加熱不十分な鶏肉の摂食との関連が懸念		小： 食肉→腸内→医療環境汚染の可能性低い		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない	

特定したハザード		○牛豚フルオロキノロンNo. 16 腸管出血性大腸菌		○牛豚フルオロキノロンNo. 16 サルモネラ		○牛豚フルオロキノロンNo. 16 カンピロバクター		○牛ツラスロマイシンNo. 17 カンピロバクター		○豚鶏バージニアマイシンNo. 19 腸球菌		○牛豚セフキノムNo. 20 サルモネラ		○牛豚セフキノムNo. 20 大腸菌		○牛豚鶏コリスチン（第1版）No. 21 大腸菌		○豚ガミスロマイシンNo. 22 カンピロバクター		○牛豚鶏マクロライド系No. 24 カンピロバクター		○牛豚鶏テトラサイクリン系No. 25 黄色ブドウ球菌	
ばく露	生物学的特性	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		小：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能、冷蔵及び冷凍保存下で徐々に死滅		中：豚及び鶏の腸内常在菌、食肉中で生存可能、家畜由来E. faeciumが一定期間ヒト腸管に定着し薬剤耐性遺伝子を伝達		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		中： 食肉中で生存可能 *mcr-1*の水平伝播		中：豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能		**小**：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能、冷蔵及び冷凍保存下で徐々に死滅 **中**：豚鶏の腸内常在菌、食肉中で生存可能		小： 食品→腸管定着の可能性低い LA-MRSAはヒトへの定着性低下	
	食品汚染状況	小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく(0～0.9%)、それらのハザードによる汚染はさらに少ない(耐性率0～2.8%)	低度（1）	小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～5.1%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない	低度（1）	小：牛肉及び豚肉の汚染は少ない（0～0.3%） 2013年の肝臓由来カンピロバクターの耐性率は高い（32.3～80.0%）	低度（1）	小：牛肉の汚染は少なく（陽性率0%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない 牛肝臓の陽性率は高い(21.6～36.6%)が、耐性率は低い(0～2%)	無視（0）	中：陽性率高く（60, 84～15%）、市販鶏肉のバージニアマイシン耐性菌の割合が高い（77%）	中等度（2）	小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～4.7%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない	低度（1）	小：陽性率高い（58～88%） 耐性率は低い（0～5.8%）	低度（1）	小： 陽性率高い（80%） 耐性株はほぼ検出なし	低度（1）	小：豚肉の汚染は少なく、それらのハザードによる汚染はさらに少ない 豚肝臓の*C. coli*陽性率は高く(14.4%)が、耐性率も高い(44.4%)が、*C. jejuni*陽性率低く(0.6%)、耐性株なし	低度（1）	小：鶏肉からの*C. jejuni*の分離率高い（31.7%）が、耐性率は極めて低い（0～1.1%）。*C.coli*の分離率低い（4.4%）が、耐性率高め（28.6～33.3%） 牛肝臓からの *C. jejuni*（分離率19.6%）、豚肝臓からの *C. coli*（14.4%）の耐性率は2.0%及び44.4%	無視（0）～中等度（2）	小： 食肉から分離 耐性株は少ない MRSAの検出率低い 食品のMRSAは主にヒト由来汚染	無視できる程度（0）
	その他要因	小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：食肉摂取による耐性菌のヒト腸内定着や、医療環境の汚染、感染症の原因となる可能性低い		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小： 食肉→腸内→医療環境汚染の可能性低い		小：懸念されるものがあまりない		比較的少ない菌数で発症するため、二次汚染に注意が必要 **小**：牛豚の肝臓の生食の提供は禁止 **中**：鶏肉は加熱用を生食用として流通・提供しないことを通知。		小： 一般的な食中毒対策で予防可能	

特定したハザード		○牛豚鶏マクロライド系（第2版）ハ		○牛豚硫酸コリスチン（第2版）No. 30				○牛豚鶏ST合剤No. 32				○牛豚フルオロキノロンNo. 33				○牛豚フルオロキノロンNo. 34					
		カンピロバクター		大腸菌		サルモネラ		大腸菌		黄色ブドウ球菌		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター	
ばく露	生物学的特性	**小**：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能、冷蔵及び冷凍保存下で徐々に死滅 **中**：豚鶏の腸内常在菌、食肉中で生存可能	無視（0）～中等度（2）	中： 食肉中で生存可能 *mcr*の水平伝播	低度（1）	中： 食肉中で生存可能 *mcr*の水平伝播	低度（1）	小： 食肉中で生存可能 食品からヒトが曝露される大腸菌のうち、尿路感染症の原因菌となるものはごく一部	低度（1）	小： 食品→腸管定着の可能性低い LA-MRSAはヒトへの定着性低下	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）
	食品汚染状況	小：鶏肉からの*C. jejuni*の分離率高い（31.7～34.4%）が、耐性率は極めて低い（0～1.1%）。*C.coli*の分離率低い（3.1～4.4%）が、耐性率高め（28.6～33.3%） 牛肝臓からの *C. jejuni*（分離率19.6%）、豚肝臓からの*C. coli*（14.4%）の耐性率は2.0%及び44.4%		小： 陽性率高い（80%） 耐性株、*mcr*+株ほぼなし		小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（10%以下）、耐性株、*mcr*+株分離されず		中： 陽性率高い（60～80%） 耐性率　約20～30%		中： 食肉から分離 ST耐性率不明 MRSAの検出率低い 食品のMRSAは主にヒト由来汚染		小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～1.0%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない（耐性率0～2.8%）		小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～12.5%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない		小：牛肉及び豚肉の汚染は少ない（0～0.3%） 2013年の肝臓由来カンピロバクターの耐性率は高い（32.3～80.0%）		小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～1.0%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない（耐性率0～2.8%）		小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく（0～12.5%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない		小：牛肉及び豚肉の汚染は少ない（0～0.3%） 2013年の肝臓由来カンピロバクターの耐性率は高い（32.3～80.0%）	
	その他要因	比較的少ない菌数で発症するため、二次汚染に注意が必要 **小**：牛豚の肝臓の生食の提供は禁止 **中**：鶏肉は加熱用を生食用として流通・提供しないことを通知。		小： 食肉→腸内→医療環境汚染の可能性低い		小：懸念されるものがあまりない		小： 懸念なし		小： 一般的な食中毒対策で予防可能		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない	

特定したハザード		○牛豚フルオロキノロンNo. 35						○牛ツラスロマイシンNo. 36		○牛馬豚鶏アミノグリコシドNo. 37				○牛ホスホマイシンNo. 38			
		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター		カンピロバクター		大腸菌		腸球菌		腸管出血性大腸菌		大腸菌	
ばく露	生物学的特性	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	中：牛及び豚の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	小：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能、冷蔵及び冷凍保存下で徐々に死滅	無視（0）	小：食肉中で生存可能 食品からヒトが曝露される大腸菌のうち、尿路感染症の原因菌となるものはごく一部	低度（1）	小：*E. faecium*の薬剤耐性株が食品由来である可能性も否定できない。しかし、このような報告は少数 家畜から食品を介して人がばく露される腸球菌のうち、心内膜炎の原因となるものはごく一部	低度（1）	中：牛の腸内常在菌、食肉中で生存可能	低度（1）	小：食品由来大腸菌のうち、尿路感染症の原因菌となるものはごく一部	無視（0）
	食品汚染状況	小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく(0～1.0%)、それらのハザードによる汚染はさらに少ない(耐性率0～2.8%)		小：牛肉及び豚肉の汚染は少なく(0～12.5%)、それらのハザードによる汚染はさらに少ない		小：牛肉及び豚肉の汚染は少ない（0～0.3%） 2013年の肝臓由来カンピロバクターの耐性率は高い（32.3～80.0%）		小：牛肉の汚染は少なく（陽性率概ね0%）、それらのハザードによる汚染はさらに少ない 牛肝臓の陽性率は高い（15.4～40.4%）が、耐性率は低い（0～2%）		中：食肉における陽性率が高い 分離株の耐性率も高い		中：食肉における陽性率が高い 分離株の耐性率も高い		小：牛肉の汚染は少なく、耐性率の情報がない。		小：食肉における陽性率が高い 分離株の耐性率は数%未満（試験菌株数が少ない場合は10～20数%）	
	その他要因	小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない		小：懸念されるものがあまりない	

○牛豚フルオロキノロンNo. 2

特定したハザード		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	中：Ⅰだが推奨薬でない	中等度（2）
	疾病の重篤性	大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		中：発生件数多いが、重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり、医療分野における耐性率も低い		小：系統の異なる代替薬あり		中：医療分野での耐性率が高い	

○豚ツラスロマイシンNo. 4

特定したハザード		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）
	疾病の重篤性	中：発生件数多いが重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり	

○牛ピルリマイシンNo. 5

特定したハザード		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	どちらも非該当：Ⅱで推奨薬でない	中等度（2）
	疾病の重篤性	中：発生件数多いが重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	大：医療分野でのマクロライド耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり しかし、リンコマイシンと交差耐性を示すマクロライドはランクⅠかつ推奨薬	

○鶏フルオロキノロンNo. 11

特定したハザード		サルモネラ		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大： Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	中：Ⅰだが推奨薬でない	中等度（2）
	疾病の重篤性	大： 重篤化する可能性 発生件数は多い		中：重篤化する可能性が大きいとは言えない 発生件数多い	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬あり		中：医療分野での耐性率が高い	

○牛ガミスロマイシンNo. 13

特定したハザード		大腸菌		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大： Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）	大：Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）
	疾病の重篤性	中： 重篤化する可能性 発生件数は不明		中：発生件数多い 重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	中： 代替薬あり 感受性確認前に使用された場合、重篤化する可能性		小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり	

○牛豚セフチオフルNo. 15

特定したハザード		サルモネラ		大腸菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大： Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	大： Ⅰかつ推奨薬（尿路感染症のみ）	中等度（2）
	疾病の重篤性	大： 発生件数は多い 重篤化する可能性		中： 発生件数は不明 重篤化する可能性	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり 医療分野での耐性率低く維持		中： 代替薬あり 家畜の関与は不明だが、ヒトで耐性率が近年上昇	

○牛豚フルオロキノロンNo. 16

特定したハザード		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	中：Ⅰだが推奨薬でない	中等度（2）
	疾病の重篤性	大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		中：発生件数多い 重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり、医療分野における耐性率も低い		小：系統の異なる代替薬あり		中：医療分野での耐性率が高い	

○牛ツラスロマイシンNo. 17

特定したハザード		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）
	疾病の重篤性	中：発生件数多い 重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり	

○豚鶏バージニアマイシンNo. 19

特定したハザード		腸球菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中： Ⅰではないが、推奨薬	中等度（2）
	疾病の重篤性	中： VREの臨床上の影響大 発生件数は不明	
	その他要因	小：Q/D製剤の実際の使用頻度は低いと推定、代替薬あり	

○牛豚セフキノムNo. 20

特定したハザード		サルモネラ	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大： Ⅰかつ推奨薬	高度（3）
	疾病の重篤性	大： 発生件数は多い 重篤化する可能性	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり 医療分野での耐性率低く維持	

○牛豚鶏コリスチン（第1版）No. 21

特定したハザード		大腸菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大： Ⅰかつ推奨薬（尿路感染症のみ）	中等度（2）
	疾病の重篤性	中： 発生件数は不明 重篤化する可能性	
	その他要因	大： CL使用頻度は低い CRE等がmcr獲得すると代替薬なし	

○豚ガミスロマイシンNo. 22

特定したハザード		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）
	疾病の重篤性	中：発生件数多い 重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり	

○牛豚鶏マクロライド系No. 24

特定したハザード		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中：Ⅰではないが、推奨薬	低度（1）
	疾病の重篤性	小：重篤化する可能性が大きいとは言えない 発生件数多いが、マクロライド耐性*C. jejuni*による発生件数は少ない	
	その他要因	小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり	

○牛豚鶏テトラサイクリン系No. 25

特定したハザード		黄色ブドウ球菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中： Ⅰではないが、推奨薬	低度（1）
	疾病の重篤性	小： 家畜由来MRSAについて 食品→ヒト感染報告ない 主な経路は動物との物理的接触	
	その他要因	小： MRSAの高MINO耐性率は減少傾向 代替薬が存在	

○牛豚鶏マクロライド系（第2版）Ａ○牛豚硫酸コリスチン（第2版）No. 30

特定したハザード		カンピロバクター		大腸菌		サルモネラ	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中：Ⅰではないが、推奨薬	低度（1）	大： Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）	中： Ⅰだが推奨薬ではない	中等度（2）
	疾病の重篤性	小：重篤化する可能性が大きいとは言えない 発生件数多いが、マクロライド耐性*C. jejuni*による発生件数は少ない		中： CRE発生件数不明 CL耐性獲得で治療難渋化		大： 重篤化する可能性否定できない	
	その他要因	小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり		中： CL使用頻度は低い CRE等がmcr獲得すると代替薬なし MDRPに*mcr*伝達しない *mcr*は高度耐性付与しない		中： CL使用頻度は低い CRE等がmcr獲得すると代替薬なし MDRPに*mcr*伝達しない *mcr*は高度耐性付与しない	

○牛豚鶏ST合剤No. 32

特定したハザード		大腸菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中： Ⅰではないが推奨薬	低度（1）
	疾病の重篤性	小： 症状多様 尿路感染症は腸内定着→泌尿器に上行感染で成立	
	その他要因	小： 代替薬あり ESBL産生/ST131で50%以上	

○牛豚フルオロキノロンNo. 33

特定したハザード		黄色ブドウ球菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中： Ⅰではないが、推奨薬	低度（1）
	疾病の重篤性	小： 重篤化の可能性 家畜由来MRSAについて 食品→ヒト感染報告ない 主な経路は動物との物理的接触	
	その他要因	小： JANISのMRSAの耐性率1%未満 尿路MRSAで耐性率19.1% 代替薬が存在	

○牛豚フルオロキノロンNo. 34

特定したハザード		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	中：Ⅰだが推奨薬でない	中等度（2）
	疾病の重篤性	大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		中：発生件数多い 重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり、医療分野における耐性率も低い		小：系統の異なる代替薬あり		中：医療分野での耐性率が高い	

○牛豚フルオロキノロンNo. 35

特定したハザード		腸管出血性大腸菌		サルモネラ		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	大：Ⅰかつ推奨薬	高度（3）	中：Ⅰだが推奨薬でない	中等度（2）
	疾病の重篤性	大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		大：発生件数多く、重篤化する可能性がある		中：発生件数多い 重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり、医療分野における耐性率も低い		小：系統の異なる代替薬あり		中：医療分野での耐性率が高い	

○牛ツラスロマイシンNo. 36

特定したハザード		カンピロバクター	
影響	Ⅰかつ推奨薬	大：Ⅰかつ推奨薬	中等度（2）
	疾病の重篤性	中：発生件数多い マクロライド耐性株により重篤化する可能性が大きいとは言えない	
	その他要因	小：医療分野での耐性率フルオロキノロンより低い 代替薬あり	

○牛馬豚鶏アミノグリコシドNo. 37

特定したハザード		大腸菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	小：どちらも非該当	無視できる程度（0）
	疾病の重篤性	小： 尿路感染症は腸内定着→泌尿器に上行感染で成立	
	その他要因	小：原則その他の抗菌性物質と併用使用 代替薬も存在	

○牛ホスホマイシンNo. 38

特定したハザード		腸球菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	小：どちらも非該当	低度（1）
	疾病の重篤性	中：易感染性患者等において、心内膜炎等の重篤な日和見感染症の原因	
	その他要因	小：原則その他の抗菌性物質と併用使用 代替薬も存在	

特定したハザード		腸管出血性大腸菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	小：どちらも非該当	中等度（2）
	疾病の重篤性	大：発生件数多く、重篤化する可能性がある	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり、医療分野における耐性率も低い	

特定したハザード		大腸菌	
影響	Ⅰかつ推奨薬	中： Ⅰではないが、推奨薬	低度（1）
	疾病の重篤性	小： 尿路感染症は腸内定着→泌尿器に上行感染で成立	
	その他要因	小：系統の異なる代替薬があり、医療分野における耐性率も低い	